

# 「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

中 村 嗣 郎

本稿は、日本語の補助用言「すぎる」が書き言葉において、どのように用いられているかを検証するために、小説などから採集した実例を分析することを目的とする。まず、第1節で、補助用言「すぎる」が言語理論に対して提起する問題に簡単に触れる<sup>1)</sup>。そして、第2節で文学作品などから採集した実例の分析をおこなう。2.1節では形式に注目し、「すぎる」の接続する形態素が形容詞・形容動詞・動詞・名詞の場合についてそれぞれ検討する。その結果をもとに、2.2節では「～すぎる」の基本的なパターンについて議論し、さらに、2.3節では、実例を採集した際に気づいたいくつかの点について言及し、第3節で全体をまとめる。

## 1. 補助用言「すぎる」

「美しすぎる」「飲みすぎる」のように、日本語で日常的に使われる補助用言「すぎる」は、他言語と比較した場合、奇妙な属性を有していると思われる。例えば、英語と比べてみると、日本語の補助用言「すぎる」と同様の働きをもつ動詞は存在しない。もちろん、英語では日本語のように複合動詞が発達していないから当然かもしれないが、「すぎる」の機能に着目するならば、それ自身が言語体系の中で特殊であることがわかる。日本語の「美しすぎる」に対応する英語は *too beautiful* と考えることができるが、この2つの比較では一見大きな違いは見られない。日本語の「すぎる」は形容詞「美しい」を修飾し、英語の *too* は形容詞 *beautiful* を修飾している。語順を除けば、修飾する側と修飾される側が隣接しているという点で共通している。

ただし、細かく見てみると、両者に違いが見つかる。「美しすぎる」はその統語範疇(=品詞)が、全体として、「すぎる」と同じ(複合)動詞だと考えられるが、*too beautiful* は *beautiful* と同じ形容詞(句)だと考えられる。また、英語の *too* は形容詞または副詞を修飾することができるが、「すぎる」は形容詞・形容動詞(例「静かすぎる」)・動詞(例「飲みすぎる」)・名詞(例「金持ちすぎる」)を修飾できる。ただし、副詞的要素は修飾できない。「\*彼はたびたびすぎて彼女の部屋を訪れた」は日本語として不適格である。さらに、「いい人すぎる」のように名詞句内の形容詞を修飾することも可能である。「\*人すぎる」は理解不能であるから、「すぎる」は「いい」を修飾していると考えるのが妥当であろう。

「飲みすぎる」「食べすぎる」「働きすぎる」のように「動詞+すぎる」の表現は日常よく用

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

いられるが、これらも注意深く観察すると、「すぎる」が動詞を直接的に修飾していると考えられるよりも、動詞が表す意味の一部を修飾していると考えたほうがよさそうである。具体的に述べると、「飲みすぎる」「食べすぎる」では摂取する物の数量が、「すぎる」の表す過剰の意味によって、修飾されている。「お餅を三つも食べすぎた」は、食べたお餅の数が全部で三つなのではなく、超過した分が三つである。「働きすぎる」では労働時間が超過の概念により修飾されている。「動詞+すぎる」の「すぎる」が動詞を直接的に修飾するのではないという考え方が妥当であることは次の例によっても示される。例えば、文脈なしでいきなり「入りすぎる」（あるいは「太郎は入りすぎた」）と言われた場合、そこに適切な意味を読み取るのは不可能だと考えられる。しかしながら、(1)のように文全体を聞いた場合、「入りすぎた」は自然に解釈される。

- (1) a. 学生が（たくさん）部屋に入りすぎた。
- b. 太郎はサークルに（たくさん）入りすぎた。
- c. 太郎は風呂に長く入りすぎた。
- d. 太郎は職場に遅く入りすぎた。
- e. 横綱は土俵にゆっくり入りすぎた。

(1)の例で、何が過剰なのかを考えてみると、(1a)では、主語の「学生」の数が過剰であり、(1b)では、「サークル」の数が過剰である。（「が」格、「に」格という異なった格によりマークされていることに注意したい。）また、(1c, d)では、ともに時間概念が過剰であるが、前者では事象が要する時間が過剰であり、後者では事象の開始時間（の遅さ）が過剰である。これらの場合、「長く」「遅く」といった表現の生起が重要である。（特に後者の場合、「\*太郎は職場に入りすぎた」とすると、同じ意味で解釈することができなくなる。）さらに(1e)は、動作の様態を表す「ゆっくり」が過剰であることを意味する。

(1)の例が示すように、補助用言「すぎる」が動詞に接続するとき、過剰がどのように解釈されるかが「動詞+すぎる」を見ただけでは必ずしも決まらない場合がある。とりわけ、(1d)における「遅く」という副詞の生起が「すぎる」の解釈と密接に結びついていることには注意すべきである。なぜなら、そうした副詞は、動詞「入る」が義務的に選択する要素ではないからであり、「入る」の項構造にはそうした要素は含まれていないと考えられるからである。このことから、「すぎる」の解釈は文レベルで考えなければならないことがわかる。ここでもう一度「すぎる」とそれが修飾する要素について考えてみると、「入りすぎる」の場合、「美しすぎる」とは修飾関係が異なっていることがわかる。

- (2) a. 太郎は職場に遅く入りすぎた。

- b. 太郎は (いつもより) 遅く職場に入りすぎた。  
 c. \*太郎は職場に入りすぎた。

上に示すように、「遅く」と「すぎる」の間には依存関係がある。そして、(2b) が示すように、「遅く」は必ずしも複合動詞「入りすぎる」の直前にある必要はない。「すぎる」の解釈が「遅く」に依存することは (2c) が非文であることからうかがえる。

これに対し、形容詞・形容動詞が「すぎる」に先行する場合、過剰の解釈は一通りしかない。「形容詞／形容動詞＋すぎる」の場合、形容詞あるいは形容動詞が表す特性の度合いが過剰であることを意味し、「動詞＋すぎる」に見られるような解釈の多様性はない。

- (3) a. (たくさんの) 部屋が汚すぎる。  
 b. もらったプレゼントが高価すぎる。

(3a) と (3b) は形容詞「汚い」と形容動詞「高価な」に「すぎる」が接続した例であるが、解釈はそれぞれ一通りしかない。(3a) において、過剰なのは、汚さの度合いであり、(3b) では、高価さの度合いである。(3a) を「汚い部屋が多すぎる」という意味で解することはできず、同様に、(3b) を「(もらったプレゼントのうち) 高価なプレゼントが多すぎる」と解釈することはできない。

さらに、「すぎる」が先行する形容詞・形容動詞にかかる場合、それらの語は度合いをもちうる特性を表さなければならない。それができない場合は「すぎる」を適切に解釈することができなくなる<sup>2)</sup>。形容詞「等しい」は、通常、度合いをもたない特性を示し、ある二つのものは等しいか、等しくないかのどちらかである。こうした観点から (4) の例を考えてみよう。

- (4) a. \*三角形 A は三角形 B と {とても／非常に} 等しい。  
 b. \*三角形 A は三角形 B と等しすぎる。  
 c. \*三角形 A はたくさんの三角形と等しすぎる。

「等しい」は度合いをもたないので、(4a) に示すように、「とても」や「非常に」で修飾すると不自然である。同様な理由から、「等しい」は「すぎる」と結びつかない。(4b) は日本語として不自然である。それでは、(4c) を「三角形 A と等しい三角形が多すぎる」という意味で解釈できるかということ、それは不可能である<sup>3)</sup>。

「名詞＋すぎる」について考えてみると、名詞は一般にモノを指し示すため、「すぎる」との相性はよくない。「\*男すぎる」でなく「男らしすぎる」「男っぽすぎる」のように「すぎ

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

る」を複合形容詞に接続するほうが自然である。ただし、「金持ちすぎる」のように、名詞の指し示すものが度合いのある属性を有していると考えられる場合には、「名詞+すぎる」は極めて自然である。

補助用言「すぎる」が接続する要素をまとめてみると、少なくとも次の3パターンがある。

- (5) a. 形容詞／形容動詞+すぎる
- b. 動詞+すぎる
- c. 名詞+すぎる

既に述べたように、「すぎる」が形容詞あるいは形容動詞に接続する場合（これ以降「形+すぎる」と示す）は解釈が一様である。これに対し、「すぎる」が動詞に接続する場合、過剰の解釈は文レベルを見るまで決定できないことがある。別の観点から見ると、「形+すぎる」は、その表現のみで解釈可能であるが、「動詞+すぎる」は単独で解釈可能の場合（例「飲みすぎる」）とそうでない場合（例「入りすぎる」）がある。また、「名詞+すぎる」の適格性は名詞の意味に依存することを見た。

## 2. 文学作品における補助用言「すぎる」の用例

それでは、実際の言語活動において、補助用言「すぎる」はどのように使われるのだろうか。本稿は文学作品の中から補助用言「すぎる」の用例を採集し、そこにどのような分布が見られるかを観察するものである。対象を基本的に文学作品に限ったのは、テキストとして入手可能なものが多いからである。「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)は、基本的に著作権の消滅した作品を読むことができるインターネット電子図書館だが、そこにある作品を今回の研究では利用した。明治期から戦前の文学作品が中心となるため、現代日本語とは多少異なる表現も見られる。補助用言「すぎる」に関して、時代による違いが見られれば、それはそれで興味深い資料を提示することになる。

対象とした作品は次の通りである。

芥川龍之介 『芋粥』『影』『好色』『地獄変』『侏儒の言葉』『トロッコ』

有島武郎 『或る女（前編）』『或る女（後編）』『生まれ出づる悩み』『星座』『小さき者へ』  
『一房の葡萄』『片信』

泉 鏡花 『高野聖』『夜叉ヶ池』

伊藤左千夫 『浜菊』『野菊の墓』

海野十三 『千年後の世界』『超人間 X 号』『特許多腕人間方式』『一坪館』『ふしぎ国探

- 検『<sup>ふしゆう</sup>俘囚』『放送された遺言』『<sup>れいこん</sup>霊魂第十号の秘密』
- 岡本かの子『家霊』『小町の芍薬』『鮎』『縮緬のころろ』『鶴は病みき』『富士』『母子叙情』『<sup>りぎよ</sup>鯉魚』『老妓抄』『私の書に就ての追憶』
- 尾崎紅葉『金色夜叉』
- 梶井基次郎『海 断片』『器乐的幻覚』『<sup>でいねい</sup>泥濘』『<sup>とち</sup>橡の花』『<sup>のんきな</sup>患者』『冬の蠅』『冬の日』『路上』
- 金子ふみ子『父』
- 菊池 寛『勲章を貰う話』
- 国木田独歩『武蔵野』
- 島崎藤村『新生』『千曲川のスケッチ』『二人の兄弟』『分配』『芽生』『夜明け前 一上』『夜明け前 一下』『夜明け前 二上』『夜明け前 二下』『藁草履』
- 太宰 治『彼は昔の彼ならず』『苦悩の年鑑』『乞食学生』『酒の追憶』『作家の手帖』『女生徒』『創生記』『小さいアルバム』『誰』『誰も知らぬ』『男女同権』『チャンス』『千代女』『津軽』『デカダン抗議』『道化の華』『トカトントン』『二十世紀旗手』『<sup>によぜがもん</sup>如是我聞』『女人訓戒』『人間失格』『葉』『恥』『花火』『花吹雪』『母』『春の盗賊』『美男子と煙草』『皮膚と心』『富嶽百景』『服装に就いて』『不審庵』『眉山』『未帰還の友に』『雌に就いて』『やんぬる哉』『<sup>らんだ</sup>懶惰の歌留多』『リイズ』『律子と貞子』『令嬢アユ』『ロマネスク』『ろまん燈籠』
- 田山花袋『少女病』
- 寺田寅彦『科学について』『自然と生物』
- 夏目漱石『草枕』『ころろ』『三四郎』『趣味の遺伝』『作家の態度』『手紙』『道楽と職業』『夏目漱石 評論集』『二百十日』『野分』『彼岸過迄』『文芸と道德』『文芸の哲学的基礎』『坊っちゃん』『<sup>まぼろし</sup>幻影の盾』『満韓ところどころ』『道草』『明暗』『模倣と独立』『門』『夢十夜』『倫敦消息』『倫敦塔』『吾輩は猫である』『私の個人主義』
- 新美南吉『おじいさんのランプ』『川』『狐』『久助君の話』『屁』『和太郎さんと牛』
- 萩原朔太郎『月に吠える』
- 樋口一葉『にごりえ』
- 宮沢賢治『毒もみのすきな署長さん』『猫の事務所』『双子の星』
- 宮本百合子『海流』『鏡餅』『風に乗って来るコロボックル』『刻々』『心の河』『雑沓』『三月の第四日曜』『渋谷家の始祖』『小村淡彩』『地は饒なり』『<sup>ゆたか</sup>乳房』『築地河岸』『七階の住人』『南路』『縫子』『禰宜ねぎ様宮田』『猫車』『一つの出来事』『一つの芽生』『日は輝けり』『日々の映り』『二人いるとき』『火のついた踵』『広場』『古き小画』『舗道』『貧しき人々の群』『道づれ』『昔の火事』『我に叛く』

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

- 森 鷗外 『山椒大夫』『青年』『ぢいさんばあさん』『百物語』『安井婦人』『キタ・セクスアリス』
- 夢野久作 『暗黒公使』『怪夢』『キチガイ地獄』『狂人は笑う』『斬られたさに』『空を飛ぶパラソル』『巡查辞職』『少女地獄』『冗談に殺す』『白髪小僧』『木魂』『超人鬚野博士』『東京人の墮落時代』『豚吉とヒョロ子』『二重心臓』『人間レコード』『一足お先に』『瓶詰地獄』『復讐』『継子』『無系統虎列刺』『虫の生命』『冥土行進曲』『山羊髻編輯長』『靈感！』『路傍の木乃伊』
- 横光利一 『機械』『時間』『厨房日記』『鳥』『比叡』『マルクスの審判』『旅愁』
- 与謝野晶子 『階級闘争の彼方へ』『何故の出兵か』『婦人改造の基礎的考察』『婦人指導者への抗議』『母性偏重を排す』『私の生ひ立ち』『私の貞操観』

以上の25人の作家の214作品から1,068例の複合動詞「すぎる」の用例を抽出した。

## 2.1. 「すぎる」が接続する要素の統語範疇

第1節で見たように、補助用言「すぎる」は異なった統語範疇に接続することが可能である。そこで、どのような要素に接続しているかを見ることにしよう。

表1

統語範疇	形容詞	形容動詞	動詞	名詞
用例数	369	197	485	17
割合(%)	34.6	18.4	45.4	1.6

採集した1,068例に関して、それらがどのような統語範疇に接続しているかをまとめたのが表1である。既に議論したように、形容詞と形容動詞は「すぎる」に対する振る舞いが同様であることから、これを「形+すぎる」のようにひとつにまとめることができる。すると、その「形+すぎる」のパターンは全体の半数の53.0% (=34.6+18.4) を占めることになる。これに次いで、「動詞+すぎる」のパターンが45.4% を占める。これらに対し「名詞+すぎる」のパターンは全体のわずか2% にも満たない。

これらの数字は何を示すのだろうか。「名詞+すぎる」が極端に少ないことは、このパターンが補助用言「すぎる」の用法の中で例外的あるいは有標 (marked) であることを示していると考えられる。すなわち、「すぎる」の用法を考えるに当たって、「名詞+すぎる」のパターンを中心に考えるのはふさわしくないとと言えるだろう。逆に「形+すぎる」と「動詞+すぎる」のパターンが全体のほぼ半数ずつを占めるということは、補助方言「すぎる」を考察するのに、そのどちらかのパターンを論じるだけでは不十分であることを示していると考えられる。



## 2.1.1. 「形+すぎる」

## 2.1.1.1. 否定の「ない」に接続する「すぎる」

それでは「形+すぎる」のパターンについて詳しく見ていこう。まず、注意すべきこととして、否定を表す「ない」は形容詞とみなして分析してある。これは活用の上から、形式的な分類をしたためであるが、「ない」に「すぎる」が接続する用例は18例である。そのうち、存在の否定を表す単純形の「ない」に「すぎる」が接続するものが14例である。「ない」の意味は存在を否定するものであるが、「なさすぎる」では文主語の数量がマイナスの方向に過剰であることを示す。この点から言えば、「なさすぎる」は「動詞+すぎる」のパターンに近い。「なさすぎる」だけでは意味をなさないからである。そのうちのいくつかは「意気地がない」「能がない」のような決まり文句に「すぎる」が接続したものである。

- (6) a. 十八にしちゃ意気地がなさ過ぎるじゃないか (夢野久作『暗黒公使』)  
 b. これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる (夏目漱石『坊っちゃん』)  
 c. …、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。(夏目漱石『吾輩は猫である』)  
 d. しかし、ないところにはなさ過ぎる金から見たら、それだけまとまった高でも大きい。(島崎藤村『分配』)  
 e. 世の譬にも天生峠は蒼空に雨が降るといふ、人の話にも神代から柚が手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは余り樹がなさ過ぎた。(泉鏡花『高野聖』)

「～な(さ)すぎる」というパターンの4例を以下に示す。

- (7) a. 一方は余り偉くなさ過ぎます。(岡本かの子『母子叙情』)  
 b. いくら英吉利人<sup>イギリスじん</sup>が大きいたって、どうも君じゃ辻褄が合わな過ぎると思ったよ。(夏目漱石『明暗』)  
 c. しかしそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた (夏目漱石『道草』)  
 d. …、貫一が<sup>あんま</sup>余り身の程を知らな過るよ。(尾崎紅葉『金色夜叉』)

(7a) では形容詞「偉い」が「ない」で否定され、それに「すぎる」が接続している。(7b-d) では動詞が否定されている。活用が「…なさすぎる」ではなく「…なすぎる」になっていることに注意されたい。(この活用については2.3.3節で取り上げる。)

### 2.1.1.2. 「形容詞+すぎる」

前節の「ない」に接続する場合を除くと「形容詞+すぎる」のパターンは351例になるが、具体的にどのような形容詞があらわれるのだろうか。具体的には80弱の形容詞が見られる。

表2

用例数	形容詞
32	早い
27	多い
22	長い
19	大きい, よい
17	遅い, 強い
15	高い
12	安い
11	短い
10	近い, ひどい
9	小さい
7	重い, はげしい, 広い
6	かたい, 若い
5	遠い
4	悪い, 熱い
3	甘い, 厳しい, 暗い, 黒い, さびしい, 寒い, 深い

表2に示したように、最も多く用例が見つかったのは「早すぎる」で、「多すぎる」「長すぎる」「大きすぎる」「よすぎる」と続く。それぞれ2例あったものを(8a), 1例だけあったものを(8b)に示す。

(8) a. 2例だけ見つかった形容詞

明るい, 新しい, 厚い, 暑い, 美しい, うまい, おとなしい, 軽い, 細かい, 白い, 鋭い, 低い, 古い, 難しい, 弱い

b. 1例だけ見つかった形容詞

暖かい, 荒い, ありがたい, 淡い, 忙しい, 薄い, うれしい, 偉い, 恐ろしい, 女らしい, 規則正しい, 貴婦人らしい, 苦しい, 気高い, 濃い, 子供っぽい, 親しい, 如才ない, ずうずうしい, 少ない, すっぱい, 狭い, 楽しい, たまらない, 冷たい, つらい, 手厳しい, 人間らしい, 太い, 細い, まぶしい, むつかしい, やさしい, やわらかい, ゆるい, 令嬢らしい



すべてを足すと 353 例となり、2 つ多いが、これは以下の等位構造の用例があったためである。

- (9) a. …, ただその姿と心が, あんまり女らしくて優し過ぎるのがこの事件の恐ろしさ  
と不思議さを生み出す原因になっているのではないかと, 考えれば考えられる  
位のことで御座います。(夢野久作『靈感!』)
- b. 千代子は色の美しい, 癖のない, 長くて多過ぎる髪の所有者だったからである。  
(夏目漱石『彼岸過迄』)

(9a) では「すぎる」は「女らしい」と「優しい」を修飾し, (9b) では「長い」と「多い」  
を修飾していると考えられる。

表 2 を見ると, 言語表現の中で基本的と考えられる形容詞が「すぎる」と共に使われている  
と言えるかもしれない。すべて単純な形態素からできている。これに対し, (8b) に示した  
中には「女らしい」「規則正しい」「貴婦人らしい」「気高い」「子供っぽい」「如才ない」「手  
厳しい」「人間らしい」「令嬢らしい」のように形態的に複雑なものも見られる。そのように  
形態的に複雑なものはそれほど頻繁には「すぎる」と一緒に使われないのかもしれない。

### 2.1.1.3. 「形容動詞+すぎる」

前節で見た「形容詞+すぎる」の例は「形容動詞+すぎる」の例の約 1.9 倍と, 「形+すぎ  
る」の中では前者の数が多いのであるが, 後者を具体的にしてみよう。形容動詞の場合, 飛  
び抜けて「すぎる」と用いられる個別の語彙項目はないようである。形容詞において「早い」  
が 8.7%, 「多い」が 7.3% と優位を占めたのに対して, 形容動詞の場合, そのように圧倒的な  
ものはない。最上位のものでも 3.0% である。(「等位構造+すぎる」の例が 1 例あったため,  
全体で 198 例となった。)

- (10) a. 6 例 見つかった形容動詞  
きれいな, 正直な, りっぱな
- b. 5 例 見つかった形容動詞  
健康な, 当然な, 派手な, 乱暴な
- c. 4 例 見つかった形容動詞  
仰山な, 単純な, ていねいな, 唐突な, まじめな
- d. 3 例 見つかった形容動詞  
鋭敏な, 勝手な, 奇抜な, 高尚な, 静かな, 地味な, 陳腐な, のんきな, 無遠  
慮な, 猛烈な
- e. 2 例 見つかった形容動詞

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

粹な、大げさな、頑固な、簡単な、高価な、幸福な、自由な、ぜいたくな、大胆な、にぎやかな、貧乏な、複雑な、不幸な、平凡な、物好きな、陽気な、りこうな、露骨な、わがままな

f. 1例 見つかった形容動詞

あからさまな、あざやかな、当たり前な、陰気な、陰惨な、うかつな、横着な、横風な、臆病な、華麗な、かわいそうな、簡潔な、緩慢な、簡略な、きまじめな、華奢な、窮屈な、気楽な、偶然な、空想的な、愚図な、結構な、下品な、高級な、強情な、好色な、巧妙な、強欲な、滑稽な、充分な、峻険な、純良な、饒舌な、丈夫な、神経過敏な、尋常な、辛辣な、脆弱な、正当な、僭越な、繊細な、センチメンタルな、素朴な、ぞんざいな、退屈な、大事な、確かな、達人な、耽情的な、直線的な、痛快な、手狭な、突飛な、生意気な、難儀な、能弁な、馬鹿丁寧な、微弱な、冷ややかな、不意な、無骨な、不思議な、不親切な、ぶっきらぼうな、豊富な、みじめな、無邪気な、無頓着な、明快な、もつともな、悠長な、冷静な

従って、「形容動詞+すぎる」のパターンを「形容詞+すぎる」のパターンと比べた場合、全体では後者の数のほうが多く、また、後者においては他よりも際立ってあらわれる語彙項目が存在することが特徴的であると言える。

2.1.2. 「動詞+すぎる」

2.1.2.1. 「すぎる」の修飾要素が明示的である場合

1,089例のうち、「形容詞+すぎる」と「形容動詞+すぎる」をひとまとめにして「形+すぎる」とすると、それは566例となり、過半数を占めるのであるが、それらを合わせなければ「動詞+すぎる」のパターンが485例と最も多い。「動詞+すぎる」はその中で異なった振る舞いを見せる。第1節で述べたように、「昨日は飲みすぎた」のように「動詞+すぎる」だけを見て解釈できるものと「昨日は学校に早く行きすぎた」のように過剰の意味が修飾する対象を「早く」のように言語化しなければならないものがある。まず、「早く行きすぎた」のように「すぎる」の修飾する要素が明示的である場合とそうでない場合の数を比較してみよう。

表3

明示的な表現あり	102
明示的な表現なし	383

表3から明らかなように、「すぎる」の修飾する要素が明示的である例はそうでない例の4分の1である。このことから、「早く行きすぎた」のような例は「動詞+すぎる」のパターンの

中では特殊であると考えられそうである。

「すぎる」が修飾する要素が明示的である場合でも、その要素がなくても同じ解釈が可能な場合がある。例えば「お酒をたくさん飲みすぎた」において、「たくさん」を省略してもしなくても同じような解釈が可能だが、そのような例は102例のうち、どれくらいを占めるのだろうか。これを調べる方法として、「すぎる」が修飾する要素がなくても同じ意味が得られるかという基準が考えられるが、それを断定するのは実際にはそれほど簡単ではない。次の用例を考えてみよう。

- (11) 子供を育てるには、寒く、ひもじく、とある人がかつて私に言ってみせたが、あれは忘れられない言葉として私の記憶に残っている。あまり多くを与え過ぎないように、そうかと言ってなるべく子供らが手足を延ばせるように。(島崎藤村『分配』)

上の例で「多くを」という表現を省略した場合、それがあつ場合と同様の解釈ができるとも言えそうだが、その判断は微妙である。そこで、まずどのような場合に省略ができるかを考えてみると、数量を表す表現か、あるいは動詞の意味と深く結びついた副詞的表現に限られるようである。例えば、それに該当しない次の例では、下線部を省略して同じ解釈を得ることはできない。

- (12) a. 少し早く眼が醒めすぎた。(横光利一『旅愁』)  
 b. その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。(芥川龍之介『トロツコ』)

上の例では「眼が醒める」は「早く」を含意せず、「来る」が「遠く」を含意しないため、省略ができない。採集された用例において、明示的な表現が省略できるか否かを考えるべき用例の数はそれほどない。従つて、一つひとつを具体的に検討していこう。次の用例では、過剰が事象の時間を修飾し、「長く」という表現が明示的にあらわれている。

- (13) a. 子供たちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。(新美南吉『狐』)  
 b. 僕は僕のこせこせしたところを余り長く弁護し過ぎたかも知れない。(夏目漱石『彼岸過迄』)  
 c. その沈黙はしかし感傷的という程度であるにはあまりに長く続き過ぎたので、外界の刺激に応じて過敏なまでに満干のできる葉子の感情は今まで浸っていた

痛烈な動乱から一皮一皮平調に還って、…（有島武郎『或る女（前編）』）

- d. しかしその眠りがまた余り長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼がかえって不安の種になった。（夏目漱石『道草』）

(13a) の「遊びすぎる」の場合、動詞「遊ぶ」は時間の概念と必ずしも強く結びつかないから、「ながく」を省略することはむしろかしいと思われる。従って、「ながく」をわざわざ表現することには意味があると考えられる。(13b) の「弁護すぎる」も基本的には同じだが、「弁護すぎる」を単独で聞くと、弁護の度合いが激しすぎるという意味が強い気がする。(13c, d) の「続きすぎる」の場合、「長く」がなくても伝わる意味は変わらないようにも感じるが、「長く」の前に「あまりに／余り」があり、それによって過剰の意味が強められている。

次の例では、下線部がなくても解釈は可能のようにも見えるが、その場合、省略されていると考えられる副詞が「強く」であると断定することは困難であり、他の例も同様である。

- (14) a. しかしねえ、東助君。(口)の場合になると、さっきもいったように、人間の身体に、他の大きな物体の引力が強くあたりすぎますから、人間は今よりもずっとからだが不自由になるし、おもしろくない力を外から受けなくてはならないのですよ。そういう世界へ、これからちょっと、案内してあげましょう」（海野十三『ふしぎ国探検』）
- b. ここには誇張も嫉妬しつともない代りに、浮華ふかに対する嫌悪けんおがあまり強く働らき過ぎた。（夏目漱石『明暗』）
- c. 現代のように量的に進歩した物理化学界で、昔のような質的発見はもはやあり得まいという人があるとすれば、それはあまり人間を高く買い過ぎ、自然を安く踏み過ぎる人であり、そうしてあまりに歴史的事実を無視する人であり、約言すれば科学自身の精神を無視する人でなければならない。（寺田寅彦『科学について』）
- d. お咲は目の前に、小さい小さい桃割——いつも根がつよくしまりすぎて、結いたてには、頭が下らないような気のしいしいした——に結って、黄色い着物を着せられていた自分が、泣きながらあっちの木の根から、こっちの木の根へと、紐ごと寝かせて置いたはずの浩を捜して歩いている姿が、まざまざと浮み上った。（宮本百合子『日は輝けり』）

そうすると、明示的に被修飾表現があらわれていることには意味があると言えよう。次も同様である。「考えすぎる」でも意味は通じるかもしれないが、具体的に「すぎる」の被修飾表

現が明示的である場合にはニュアンスが異なると思われる。

- (15) a. ごく平凡なつまらない事までも、恐ろしく深刻に考え過ぎる癖があるのです。  
(夢野久作『復讐』)
- b. とやしばらくして園がはじめて顔を上げて静かに人見を見た。これはまた園  
があまり真剣に考えすぎたなと思うと、人見には即座に返事をするのが躊躇ちゆうちよ  
された。(有島武郎『星座』)

さらに次の用例では、過剰の意味が数量を修飾しているが、すべての例で「あまりに」といった表現が加わっていることに注意されたい(先の(13c, d)を参照)。これは表現者が「すぎる」の修飾要素を意図的に表現している顕れであると考えられる。

- (16) a. これはあまりに多くを許し過ぎた結果である。(島崎藤村『夜明け前 第一部  
上』)
- b. 子供を育てるには、寒く、ひもじく、とある人がかつて私に言ってみせたが、  
あれは忘れられない言葉として私の記憶に残っている。あまり多くを与え過ぎ  
ないように、そうかと言ってなるべく子供らが手足を延ばせるように。(島崎藤  
村『分配』)(= (11))
- c. 健三は兄の道伴になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎた。(夏目漱石『道  
草』)
- d. あんまり沢山ありすぎて、みんな馬鹿になってるのだよ。(横光利一『旅愁』)

次の例でも同様のことが言える。実際、「あまりよく」がなくても日本語としては不自然ではないと思われるが、わざわざそうした表現を用いていることには意味があるのだろう。

- (17) 他人の空似にしてはあまりよく似過ぎていて、呆れて穴の明く程その横顔を見て  
おりました。(夢野久作『白髪小僧』)

従って、採集した用例を見る限り、「お酒をたくさん飲みすぎた」の「たくさん」のようにあってもなくてもいいような要素はわざわざ表現されないとも考えられる。(これが正しいかどうかは、被修飾要素が明示的でない場合を検証する必要がある。)ちなみに、この節で問題にしている102例中37例に「あまりに」のような表現が加わっている。

「すぎる」が、明示的な表現を修飾すると考えられる場合、それらの表現が文の中でどのような地位にあるかを考えてみよう。まず、「すぎる」に先行する動詞から見て、そうした表現

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

が義務的である場合がある。次の例を見てほしい。

(18) ただ難点はあまりにここは理想的でありすぎた。(横光利一『比叡』)

ここでは「すぎる」は「理想的」が表す意味を修飾していると考えられるが、動詞「ある」から見れば、「理想的で」という要素は、義務的な要素である。つまり、「～である」という形でなければならない。以下はすべてそうした例である。(19c)は「自由な気持ちで」の中の「自由な」を修飾しているという点で興味深い。これについては後に取り上げる。

- (19) a. 私はあんなに好意をもって空想して上げてのではないかと云ったところで彼女は微笑しながら、それはあなたの御勝手にございますと云うだろう、自分は喜劇役者であり過ぎる。(宮本百合子『一つの出来事』)
- b. ——一年昔のあなたは、幸福過て、思いのままでありすぎて、僕なんかには眩しいようでした。(宮本百合子『火のついた踵』)
- c. あんまり自由な気持ちでありすぎる二人だった。(横光利一『旅愁』)
- d. お人好しであり過ぎる——。(宮本百合子『一つの出来事』)

また、「すぎる」が「～(に／と)する」の「～(に／と)」の部分修飾する場合もある。これらの場合、「～(に／と)する」全体を「すぎる」が修飾しているとも考えることも可能かもしれない。例えば、(20c-f)の「馬鹿にしすぎる」は過剰が「馬鹿にする」が表す度合いを修飾しているとも考えることもできるだろう。

- (20) a. 「私がお延を大事にし過ぎるのが悪いとおっしゃるほかに、お延自身に何か欠点でもあるなら、御遠慮なく忠告していただきたいと思います」(夏目漱石『明暗』)
- b. おれを最負<sup>ひいき</sup>にし過ぎるため？(夏目漱石『明暗』)
- c. 「悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大変残念そうである。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- d. 「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませぬ」(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- e. それを何十万年何百万年の生い立ちの話をするなんて、あんまり親をばかにし過ぎるぞ。(岡本かの子『富士』)
- f. あんまりみんな馬鹿にしすぎたんだから。たしかにその点文句は皆には云えないですよ。(横光利一『旅愁』)

- g. 三人ともあまり自分の泳ぎの姿を氣にしすぎて、そのために子供を捜しあるくのがおろそかになり、ようやく捜しあてたものは全くの死骸しがいであった。(太宰治『ロマネスク』)
- h. 僕はスタイルをあまり氣にしすぎたやうである。(太宰治『道化の華』)
- i. …、これまで親しいものの死後をあまり人任せにし過ぎたと言ひ、旧宿役人時代から彼は彼なりに在家ざいけと寺方との関係を考えて来たとも言つて、… (島崎藤村『夜明け前 第二部下』)
- j. その娘さんを番頭が余りに大切にして、家の戸閉りなどを厳重にしすぎてあつたために、誰も外へは出られなかつたのださうです。(与謝野晶子『私の生ひ立ち』)
- k. あまり淡淡としすぎたほどの落ちつきで真紀子は久慈を見上げて訊ねた。(横光利一『旅愁』)
- l. 「何の稽古が始るのかい。——吉村について感じたつて……漠然としすぎて問題になりゃあしないよ」(宮本百合子『心の河』)
- m. いつ見てもおぬいさんはきちんとしすぎるほどつつましく身だしなみをしていた。(有島武郎『星座』)
- n. どうやら、うつとりしすぎたやうである。(太宰治『道化の華』)
- o. つまり僕の、こんなにうつとりしすぎたのも、僕の心がそれだけ悪魔的でないからである。(太宰治『道化の華』)
- p. 上部は大変鄭寧で、お腹の中はしっかりし過ぎるくらいしっかりしているんだから。(夏目漱石『明暗』)
- q. その癖又、弱々しいところもあるかと思うとしっかりし過ぎているところもあるし、落着いているようにも見えれば慌てているようにも見える。(夢野久作『暗黒公使』)
- r. あんまりハッキリし過ぎているので頬返しが付かない。(夢野久作『山羊髯編輯長』)
- s. 私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。(夏目漱石『こころ』)
- t. …、思いがけもなく自分の体験にピッタリし過ぎる位ピッタリした学説を発見したので、彼はドキンとする程驚ろかされたものであった。(夢野久作『木魂』)
- u. 少しぼんやりしすぎて生れてきたのではないだろうか。(有島武郎『星座』)
- v. 「チャッカリしすぎてゐるぞ！」(宮本百合子『乳房』)
- w. これは我々文明人が、あまりに眼とか耳とかいう五官の活用に信頼し過ぎたり、理詰めり詰めの器械を迷信し過ぎたりするために、この非常に貴い、… (夢野久作『暗



黒公使) )

「ある，する」のように意味が軽い動詞としては「する」の尊敬語の「なさる」がある。

- (21) a. いったいこういうと失礼なようですが，あなたがあんまり延子さんを大事になさり過ぎるからよ」(夏目漱石『明暗』)
- b. 「どうも貴女はあの男と心安くなさり過ぎると思っておりましたが……」(夢野久作『二重心臓』)

「～(に) なる」において，過剰が「～」の部分で修飾する場合も，動詞の意味は軽いと言えるかもしれない。

- (22) a. あんまり神経過敏になり過ぎていると云って，笑われるに違い無いであろう事を，私自身にも意識し過ぎるくらい意識していた。(夢野久作『一足お先に』)
- b. ちとパラドックスになり過ぎますが，およそ喧嘩のものは御互を完全の人間と認めて，さてやってみると案外予期に反するから起るのであります。(夏目漱石『作家の態度』)
- c. しかしそれを嬉しがるには，彼女の胸が，あまり自分の感想で，いっぱいになり過ぎていた。(夏目漱石『明暗』)
- d. 見たまえ，舞台の役者というものは，芝居全体のことよりも，それぞれの持ち役に一生懸命になり過ぎるようなところがあるね。(島崎藤村『夜明け前 第二部上』)
- e. 同じ事であるとする，与えられた西洋の文学史を唯一の真と認めて，万事これに訴えて決しようとするのは少し狭くなり過ぎるかも知れません。(夏目漱石『作家の態度』)
- f. その中に九月の末になって，やっと開始された兇器捜索を目的の溜池乾で，草川巡査はあんまり夢中になり過ぎたのであろう。(夢野久作『巡査辞職』)
- g. 「あの娘は，あまり偉くなりすぎたよ」(岡本かの子『富士』)
- h. 「余り自由になり過ぎて困ります」(森鷗外『青年』)
- i. 近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る。(夏目漱石『三四郎』)
- j. この手紙も今までにすでに長くなり過ぎたようだ。(有島武郎『片信』)
- k. 飛驒は，また，すこし有頂天になりすぎてみた。(太宰治『道化の華』)
- l. 私はこの公認された事実を勝手に布衍しているかも知れないが，始終接触し親しくなり過ぎた男女の間には，恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてし

まうように考えています。(夏目漱石『ころ』)

- m. でも、これでもあたし長くなりすぎた方なの。(横光利一『旅愁』)
- n. ところへ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥った男が出て来て、大変丁寧に挨拶をしたので、宗助は少し椅子の上で狼狽たように首を動かした。(夏目漱石『門』)

次の例の解釈はどのようになるだろうか。

- (23) a. 「……驚いたね。アンマリ早くエラクなり過ぎて恐いみたいじゃないか」(夢野久作『二重心臓』)
- b. あまりに長く世話に成り過ぎた、と私は思った(島崎藤村『芽生』)
- c. 父はあまりによき父になり過ぎた。(岡本かの子『母子叙情』)
- d. 全くこのごろは化け物どもがあまりにいなくなり過ぎた感がある。(寺田寅彦『科学について』)

例えば (23a) は、文脈から判断する限り、「偉くなったのが早すぎる」という解釈がふさわしいと思われる。そして、そうした解釈を強制するのが「アンマリ」という表現だと考えられる。すなわち「アンマリ」が「早く」と結びつき、一種の係り結びのような形で「すぎる」に繋がっていくと考えられる。「(アンマリ)のない「早くえらくなりすぎる」だと「えらい」が修飾されるように感じる。後注2も参照。) (23b) の例も似たような構造をもっている。(23c) では過剰の意味が名詞句内の一部である「よき」を修飾している。(23d) では「なる」に先行する要素は「いる」の否定の「いない」である。

以上、意味の軽い動詞の前にある要素を「すぎる」が修飾する例(具体的には (18), (19a-d), (20a-w), (21a-b), (22a-n)) は全部で44例である。これらの例では被修飾要素が意味的に文の主たる要素となっている。「長くなりすぎる」は「長すぎる」に起動相の意味が加わったものと考えられる。) 仮にこうした例を本節で問題としている102例から除外すると58例となり、「すぎる」が修飾する要素が明示的である場合は485例中の58例となり、全体の12.0%にしかすぎなくなる。

「すぎる」が名詞句内の要素を修飾する例を既に見たが、次の例を考えてみよう。

- (24) a. 友人同士としては千鶴子にあまり好意をよせずすぎるが、愛人としてはあんまり自由な気持ちでありすぎる二人だった。(横光利一『旅愁』)(= (19c))
- b. 父はあまりによき父になり過ぎた。(岡本かの子『母子叙情』)(= (23c))
- c. 「ほんとうに、いい住居、あんた一人じゃあ、<sup>もつたい</sup>勿体ないようねえ」かの女はそういいながら、うっかりしたことを云い過ぎたと、むす子の顔をみると、むす子

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

は齒<sup>し</sup>牙<sup>が</sup>にかけず、晴々と笑っていて、「いいものを見せましょうか」と、台所から一<sup>いつちよう</sup>挺<sup>きばさみ</sup>日本の木鋏を持ち出した。(岡本かの子『母子叙情』)

- d. 少し乱暴なことを云い過ぎたと矢代は後悔したが、もう致し方もなくにやにやして答えるのだった。(横光利一『旅愁』)
- e. 「狡い男め、貴様が何を待っているか、儂には判っているぞ。儂の情慾で一儲けしたいのだけれうが、それにはちと年寄<sup>としよ</sup>のところへ来すぎたらしいぞ」(宮本百合子『古き小画』)
- f. 母はちょっと口籠<sup>くちごも</sup>った。敬太郎もただ自分の好奇心を満足させるためにあまり立ち入った質問をかけ過ぎたと気がついた。何とかして話題を転じようと考えているうちに、相手の方で、…(夏目漱石『彼岸過迄』)
- g. 空腹に濃い茶を飲み過ぎたような早い動悸を感じ、ときどき矢代は起き上ってみた。(横光利一『旅愁』)

(24c-e) では意味の軽い「こと」「ところ」が使われている。(24f) では「質問」を修飾する「立ち入った」が「すぎる」により修飾されている。(24g) では「濃い茶」の「濃い」が「すぎる」によって修飾されている。こうしたパターンは 485 例中の 7 例にすぎない (わずか 1.4%)。

最後に、具体的にどのような明示的表現が「すぎる」の被修飾要素となっているか見ておこう。表 4 に問題となる 102 例中、2 例以上あらわれるものを示した。(表にない 59 例は一度しかあらわれないものである。) 上位の「早く」「長く」に対応する形容詞「早い」「長い」は「早すぎる」「長すぎる」という形で多くあらわれることを思い出してほしい (表 2 を参照)。

表 4

10	早く
7	長く
4	強く
3	多く (を)
3	馬鹿に
2	うっとり
2	大きく
2	しっかり
2	自由な／に
2	大事に
2	高く

「形+すぎる」の場合、「早すぎる」に次いで多かったのは「多すぎる」であったが、「動詞+すぎる」のパターンにおいて、過剰が数量を修飾する場合は、次節で見ると、「多く」という形を明示化する必要はない。表4の「多く」の3例のうち、2例が「多くを」という「を」格を伴った形であることに注意されたい。その場合、目的語という文中における重要な要素となっている。

#### 2.1.2.2. 「すぎる」の修飾要素が明示的でない場合

既に述べたことであるが、「動詞+すぎる」のパターンでは、過剰の意味が何を修飾するかが明示的でない場合のほうが圧倒的である(485例中383例, すなわち79.0%)。それでは、「すぎる」はどのような概念を修飾するのであろうか。解釈の可能性はいくつかに分類できる。まず、上の議論で言及したように、過剰が数量を修飾する場合がある。分類上、主語の数量を修飾するか、目的語の数量を修飾するかに分けて考えてみよう。前者の例を(25)、後者の例を(26)に示す。

- (25) a. そうして案外に寄付が集まり過ぎたお蔭で、銅像が立像になりそうになって来たので、すっかり面喰って弱っておられる校長先生の味方になる決心をされました。(夢野久作『少女地獄』)
- b. 彼女の立場は丁度、働き者が二人では手が余り過ぎる。(宮本百合子『小村淡彩』)
- c. しまいには、君があんまり色気があり過ぎるからだ<sup>からか</sup>と調戯い出した。(夏目漱石『彼岸過迄』)
- d. 店の品物があまり売れ過ぎるので、午後一時頃には品物が店になくなりかけた。(海野十三『一坪館』)
- e. この話は、すこし時がかかり過ぎたわい。(島崎藤村『夜明け前 第二部上』)
- f. ろくは、唇の裏に唾がたまり過ぎているような言葉つきで、「いいえ、鎌倉の方にもいました」(宮本百合子『小村淡彩』)
- (26) a. わたくしはけさきやべつの皿を喰べすぎました、(萩原朔太郎『月に吠える』)
- b. 淀橋の区役所に勤めていて、ことは三十四だか五だかになって、赤ちゃんも去年生れたのに、まだ若い者のつもりで、時々お酒を飲みすぎて、しくじりをする事もあるようです。(太宰治『千代女』)
- c. つまり乳が不足したのさ。代りに山羊の乳を人間に飲ませすぎたのだ。(横光利一『旅愁』)
- d. 今月はお金を使いすぎて、蟄居<sup>ちつきよ</sup>の形なのです。(太宰治『小さいアルバム』)
- e. 二人に争うことがあるといえ、夜眠るときどちらかの一方が早く眠りすぎた

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

とか、デパートで少し買物の時間をかけすぎたとか、いくらか会う時間が遅すぎたとかいうほどのことよりなかった。(横光利一『旅愁』)

- f. 世間並みの立身を望んで焦るには、孝之進は年をとりすぎたし、また不治の眼疾をどうすることも出来なかった。(宮本百合子『日は輝けり』)
- g. 白粉を塗り過ぎる。(夢野久作『東京人の墮落時代』)

「動詞+すぎる」のパターンで、動詞が表す動作の程度を「すぎる」が修飾することもある。

- (27) a. うちの者の愛に頼り過ぎるということは自己満足です。(岡本かの子『母子叙情』)
- b. 「そうか、そりゃ失敬した。あんまり疲れ過ぎたんだよ」(夏目漱石『二百十日』)
- c. ただ、わたしの心配することは、半蔵さんがあまり人を信じ過ぎるからです。(島崎藤村『夜明け前 第一部下』)
- d. 煩わしいのはそれが形式で、その他の気持の上での分量を何も相手に与えないから、一方の形式が目立ち過ぎて煩わしく感じられるのだ。(岡本かの子『母子叙情』)
- e. 「その男が笑い過ぎて死んだんだ」(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- f. …研究していたが、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。(夏目漱石『吾輩は猫である』)

「温める」のように、動詞がその意味の中に何らかの属性を指定することがある。「すぎる」はそうした固有の状態を修飾することもある。

- (28) a. 親子かと思えば、どうもそうでもないようだし、夫婦にしては年が違い過ぎる。(島崎藤村『夜明け前 第一部下』)
- b. いずれも尖り過ぎるほど尖った神経と狭い女の胸とを示したようなもので、読んで見る岸本には余り好い気持はしなかった。(島崎藤村『新生』)
- c. 全体、髭があんまり、延び過ぎてるんだ」(夏目漱石『草枕』)
- d. この写真は、すなわち太り過ぎて、てれて笑っているところです。(太宰治『小さいアルバム』)
- e. 田口は昔しある御茶屋へ行って、姉さんこの電気灯は熱り過ぎるね、もう少し暗くしておくれと頼んだ事があるそうだ。(夏目漱石『彼岸過迄』)

このほかに、過剰が距離・時間・頻度を修飾する場合もある。

- (29) まあ、俺に言わせると、節ちゃんはお父さんに接近し過ぎたんだね。(島崎藤村『新生』)
- (30) 勘太郎は寝過ぎたと思って、急いで竈の前に行って火を入れようとしたのですが、どうしても昨夜の夢が気になってたまりません。(夢野久作『虫の生命』)
- (31) どうかすると彼は逢い過ぎるほど逢わねば成らないような客をその二階に避け、諸方から貰った手紙を一まとめにして持って来て、半日独りで読み暮すこともあった。(島崎藤村『新生』)

実際に、「動詞+すぎる」の用例が上のどの範疇に属するかを決めるのはそれほど簡単ではない。しかしながら、400 に近い数の用例を分析するならば、そこにある程度の傾向を見ることができよう。表5に分析の結果をまとめてみる。

表5

主語の数量	28
目的語の数量	62
動作の程度	241
固有の状態	23
距離	8
時間	10
頻度	2
その他	9

対象となる 383 例中、過剰が動作の程度を修飾する場合は最も多く、241 例 (63.0%) を占める。目的語の数量を修飾する場合は 62 例 (16.2%) で、主語の数量を修飾する場合は 28 例 (7.3%) である。両者を合わせると、90 例 (23.5%) となる。また、動詞の意味の中で指定された固有の状態を修飾する場合は 23 例 (6.0%) である。

まず、「すぎる」の修飾の対象が動作の程度の場合を見てみよう。どのような動詞が多いかを表6に示す。上位の「言う(云う)」「知る」はそれぞれ 15 例ずつある (3.3%)。

- (32) a. インチキ新聞の記者になつたり、暴力団の走り使いになつたり、とにかく、ダメな男に出来る仕事の全部をやったと言っても決して言い過ぎではないかと存

表 6

15	言う（云う），知る
10	利く
8	わかる
6	出る
5	する
4	当たる，考える，信じる，できる，目立つ
3	行く，整う，なれる，働く，張る，やる

じます。（太宰治『男女同権』）

- b. 「僕あんまり云い過ぎました？」（岡本かの子『母子叙情』）
- c. 女が，戦争の勝敗の鍵<sup>かぎ</sup>を握っている，というのは言い過ぎであろうか。（太宰治『作家の手帖』）
- (33) a. 一銭五厘のねうちが，どんなに恐ろしいものか，知り過ぎるくらい，知っているだろう。（夢野久作『継子』）
- b. むす子が親の金でモンパルナスに出掛けて行ってるのを知らないのかという口調だった。かの女達はよく知っていた。知り過ぎていた。（岡本かの子『母子叙情』）
- c. 今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云う事を知り過ぎていと云う事だ。（夏目漱石『吾輩は猫である』）
- d. それを，むぎむぎと，「私は参りません」と云うには，ゆき子は余り良人の心持を知り過ぎていた。（宮本百合子『我に叛く』）

「言う（云う）」で特徴的なのは「言いすぎ」が名詞として使われている例が見られることである。

- (34) a. インチキ新聞の記者になったり，暴力団の走り使いになったり，とにかく，ダメな男に出来る仕事の全部をやったと言っても決して言い過ぎではないかと存じます。（太宰治『男女同権』）
- b. 僕は乱暴なもんだから……いい過ぎがあったらほんとうに許してください。（有島武郎『或る女（後編）』）
- c. 女が，戦争の勝敗の鍵<sup>かぎ</sup>を握っている，というのは言い過ぎであろうか。（太宰治『作家の手帖』）



- d. はっと口をつぐんだ。自身の言いすぎに気がついたのである。(太宰治『春の盗賊』)
- e. これは明らかに私の言ひすぎで、私は最近に於いてここに宿泊した事は無く、ただ汽車の窓からこの温泉町の家々を眺め、さうして貧しい芸術家の小さい勘でものを言つてゐるだけで、… (太宰治『津軽』)

ここで、名詞「～すぎ」について述べておくと、次の例では「～すぎ」が主部に対する述部として用いられている。

- (35) a. なるほど私の小言も少し云い過ぎかも知れないが、民子だって何もそれほど口惜しがってくれなくてもよさそうなものじゃないか。(伊藤左千夫『野菊の墓』)
- b. 曰く、見どころがあつて、稽古がきびしすぎ。(太宰治『二十世紀旗手』)

「～すぎ」が名詞として用いられている用例には他に次のものがある。

- (36) a. 「葉子さん、それは疑い過ぎというものです」(有島武郎『或る女(前編)』)
- b. しかしそれは吉田の思い過ぎで、それはそのお婆さんが鞆で人に手真似をしてもらわないと話を通じず、しかも自分は鼻のつぶれた声で物を言うのでいっそう人に軽蔑的な印象を与えるからで、… (梶井基次郎『のんきな患者』)
- c. 副院長はコンナ固くるしいお世辞を云つて、自分の饒舌り過ぎを取り繕いつつ、気取った態度で出て行つた。(夢野久作『一足お先に』)
- d. 「麦とろの食べ過ぎかね」(岡本かの子『老妓抄』)
- e. 飲みすぎか、怠けぐらいのところらしい幸治がにやにやしながら、… (宮本百合子『二人いるとき』)
- f. ただ杏庵は日ごろ好酒家の半蔵が飲み過ぎの癖をよく承知していたし、それにその人の不眠の症状や顔のようすなぞから推して、すくなくも精神に異状のあるものと認め、病人の手当てを怠らないようにとの注意を与えた。(島崎藤村『夜明け前 第二部下』)
- g. 庄助は半蔵が飲み過ぎからとでも思ったかして、囲炉裏ばたまでついて来て、土間に下駄をさがす時の彼に言った。(島崎藤村『夜明け前 第二部下』)
- h. それから数日後、僕はお酒の飲みすぎで、突然、からだの調子を悪くして、十日ほど寝込み、どうやら恢復したので、また酒を飲みに新宿に出かけた。(太宰治『眉山』)

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

名詞として使われている「飲みすぎ」は4例で、名詞としての用法が浸透していることを窺わせる。(なお、便宜上、「食べすぎ」「飲みすぎ」は目的語の数量を過剰が修飾するものとして分類した。)

次に過剰が主語あるいは目的語の数量を修飾する場合を見ることにしよう。まず、主語の数量を修飾する例が28例あるが、そのうち、動詞「ある」が16例を占める(57.1%)。例をいくつか示す<sup>4)</sup>。

- (37) a. 瑛子は断言するように云ったが、その調子にはしんから冷静な性格でそれを信じないというには余り熱がありすぎて、却って宏子には一種の不安が感じられるのであった。(宮本百合子『海流』)
- b. だからやりたい事があり過ぎて、十の二三も実行できない。(夏目漱石『門』)
- c. 君には余裕があり過ぎる。(夏目漱石『明暗』)
- d. やっぱり、金があり過ぎて、退屈だと、そんな真似がしたくなるんだね。(夏目漱石『二百十日』)
- e. あるところにはあり過ぎるような金から見たら、おそらく二万円ぐらいはなんでもないかもしれない。(島崎藤村『分配』)

目的語の数量を過剰が修飾する例は62例と主語の数量を修飾する例の倍である。使われている動詞で最も多いのは「飲む」で、19例(30.6%)を占める。飲む対象としてはお酒が多いが、そうでない例もある。

- (38) a. 前夜、少し飲みすぎたのである。(太宰治『津軽』)
- b. あたしたちは、すこし飲みすぎたようだ。(海野十三『俘囚』)
- c. このやうな自己嫌悪を、お酒を飲みすぎた後には必ず、おそらくは数千回、繰り返して経験しながら、未だに酒を断然廃す気持にはなれないのである。(太宰治『津軽』)
- d. ただ杏庵は日ごろ好酒家の半蔵が飲み過ぎの癖をよく承知していたし、それにその人の不眠の症状や顔のようすなぞから推して、すくなくも精神に異状のあるものと認め、病人の手当てを怠らないようにとの注意を与えた。(島崎藤村『夜明け前 第二部下』)
- e. それから数日後、僕はお酒の飲みすぎで、突然、からだの調子を悪くして、十日ほど寝込み、どうやら回復したので、また酒を飲みに新宿に出かけた。(太宰治『眉山』)
- f. それを見た途端に、ハハア、これは吐酒石酸を飲みすぎたんだナ……と思った。

(夢野久作『無系統虎列刺』)

- g. どうも様子が怪訝おかしいようだから、近所の医者おみを呼んで来て診てもらったら、睡り薬のを服み過ぎているらしい。(夢野久作『山羊髻編輯長』)
- h. 真白い羽はぶたえ二重のバジャマを引っかけながら、どうも昨夜、催眠剤おくすりを服み過ぎたらしいと云い云い湯に這入ったというんだ(夢野久作『二重心臓』)

前節で「お酒をたくさん飲みすぎる」のように「たくさん」などを用いて、過剰の修飾の対象をはっきりさせる可能性がありうることを見たが、実際にはそのような表現はほとんど見つからない。わざわざ言うまでもなく、主語・目的語の数量を「すぎる」が修飾できるということだろう。

動詞の意味が特有の属性に言及することがあるが、「すぎる」はその属性を修飾できる。そうした例が23例、見つかった。

- (39) a. こんな魔法使いの娘と、王子さまでは身分がちがいますよ(太宰治『ろまん燈籠』)
- b. 延び過ぎた芝の根もとが腐れかかっているのを見た時に、私はふと単純な言葉の上の連想から、あまりに栄え茂りすぎた物質的文化のために人間生活の根本が腐れかかるのではないかと思ってみた。(寺田寅彦『自然と生物』)
- c. 「しかし、寿平次さん、こう江戸のように開け過ぎてしまったら、動きが取れずまい。わたしたちは山猿でいい。」(島崎藤村『夜明け前 第一部上』)
- d. 田口は昔むかしある御茶屋へ行って、姉さんこの電気灯は熱ほてり過ぎるね、もう少し暗くしておくれと頼んだ事があるそうだ。(夏目漱石『彼岸過迄』)

使われている動詞としては、「違う」が6例(26.1%)、「のびる」が5例(21.7%)である。

今まで示した「動作の程度」「主語・目的語の数量」「固有の状態」の例が、この節で問題としている例のほとんど(383例中354例=92.4%)を占める。過剰の意味の修飾の対象として分類上、「距離」「時間」「頻度」を設けておいたが、それらに分類されるものは少ない(前掲表5を参照)。以上の分類には合わないような用例が僅かであるが見つかったので、それらをここで示しておく。

- (40) a. その時、岸本は日頃逢い過ぎるほど人に逢っていることを書いて、吾儕二人は互いに未知の友として同じ柳並木のかげを楽もうではないか、という意味の返事をその青年に出した。(島崎藤村『新生』)
- b. これも十円の小遣いは余りに真実の幸福に溢れ過ぎているからである。(芥川

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

龍之介『侏儒の言葉』)

- c. こう云う光景は夢みるにさえ、余りに真実の幸福に溢れすぎているからである。  
(芥川龍之介『侏儒の言葉』)

(40a) では「すぎる」の修飾の対象は日頃逢う人の数である。動詞「逢う」は「に」格名詞句を取るのので、上の分類から漏れた。また、(40b, c) も過剰であるのが「に」格名詞句の指し示す「幸福」の量だと考えられる。以下の例では、動詞単独の意味に帰して考えるよりも、一種の熟語が表す意味を考え、その動作の程度が過剰であることが示されている。

- (41) a. 手を入れすぎていないだけに、見ていて心持がいい。(夏目漱石『三四郎』)  
b. そんな仙骨を相手にしちゃ少々骨が折れ過ぎる。(夏目漱石『吾輩は猫である』)  
c. 総裁という言葉は、世間にはどう通用するか知らないが、余が旧友中村是公なかむら ぜこうを代表する名詞としては、あまりにえら過ぎて、あまりに大袈裟おおげ さまで、あまりに親しみがなくて、あまりに角が出過ぎている。(夏目漱石『満韓ところどころ』)  
d. あまりにポーズをつけすぎる。(太宰治『女生徒』)  
e. 「自分は、ポーズをつくりすぎて、ポーズに引きずられている嘘つきの化けものだ」なんて言って、これがまた、一つのポーズなのだから、動きがとれない。  
(太宰治『女生徒』)  
f. あまりに自分の姪のことで深傷を負い過ぎていた。(島崎藤村『新生』)

(41a) では「手を入れる」という慣用表現が表す意味の度合いが過剰となる。同様に (41b-e) では「骨が折れる」「角が出る」「ポーズをつける」「ポーズを作る」という句レベルの意味の動作の度合いを「すぎる」が修飾している。(41f) では「深傷を負う」という表現が問題になる。

### 2.1.3. 「名詞+すぎる」

採集した1,068例中、補助用言「すぎる」が名詞に接続している用例は僅か17例(1.6%)である。このタイプは以下に見るように二つに分けることができる。

#### 2.1.3.1. 「すぎる」が名詞の意味を修飾する場合

第1節で「金持ちすぎる」のような表現が可能であることを述べたが、その場合、過剰は名詞が指し示す度合いをもった概念を修飾する。こうした例は17例中14例である。

- (42) a. 彼の未来、それを眼の前に描き出すのは、あまりに漠然過ぎた。(夏目漱石『明暗』)  
b. 「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。(夏目漱

石『吾輩は猫である』)

- c. しかし、活動にもいろいろあるがいかなる意味の活動か一と口に云えるかと聞かれると、少し臆断過ぎるようですが、私はこう答えても差支ないと考えます。(夏目漱石『作家の態度』)
- d. けれども一応宗助に話してからでなくっては、余り専断過ぎると心づいた上、品物の歴史が歴史だけに、なおさら遠慮して、いずれ帰ったらよく相談して見た上でと答えたまま、道具屋を帰そうとした。(夏目漱石『門』)
- e. 「だって、あまりおかしい、それも十八、九とか二十二、三とかなら、そういうこともあるかもしれないが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもなろうというんじゃないか。君の言うことは生理学万能で、どうも断定すぎるよ」(田山花袋『少女病』)
- f. 彼はそれを突いて、また矢来の坂を上りながら、昨日の下女が今日も出て来て、せっかくですが今日は御天気過ぎますから、もし曇った日においで下さいましと云ったらどんなものだろうと想像した。(夏目漱石『彼岸過迄』)
- g. 東京一、日本一の東洋時報社で、給仕からタタキ上げた腕ッコキの新聞記者といえ、チョット立派に聞こえるかも知れないが、それがアンマリ腕ッコキ過ぎたのだろう。(夢野久作『山羊髯編輯長』)
- h. それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。(夏目漱石『坊っちゃん』)
- i. あの別嬪の嬢も好人物過ぎる位、好人物という話です」(夢野久作『巡査辞職』)
- j. 君は合理主義者すぎるんだよ。(横光利一『旅愁』)
- k. 「アハハハハ。イヤ。名探偵名探偵。その通りその通り。寸分間違いない話だが……そこが探偵小説と実際と違うところなんだよ。つまり君がアンマリ名探偵過ぎるんだ」(夢野久作『二重心臓』)
- l. 「……名探偵過ぎるって……」(夢野久作『二重心臓』)
- m. 珍品過ぎるわ。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- n. 一体 M 老人はすべてに遣り手すぎた。(宮本百合子『日は輝けり』)

(42h, i) の「好人物すぎる」は「好人物」が「好」という形態素によって加わる意味を「すぎる」が修飾している。「\*人物すぎる」は解釈不能である。(42j) の「合理主義者すぎる」も「合理主義」の部分で程度の意味が表されている。また、(42k, l) の「名探偵すぎる」を「\*探偵すぎる」とすることはできない。(42m) の「珍品すぎる」では「珍」、(42n) の「やり手すぎる」では「やり」が重要である。こうした例では、名詞の一部となっている形態素が重要で、それが表す意味を過剰の概念が修飾していると考えられる。

### 2.1.3.2. 「すぎる」が名詞句内の修飾要素を修飾する場合

統語的に分析した場合、「すぎる」が名詞という語レベルに直接的に接続しているというよりも、名詞句という句レベルに接続し、その名詞句内で主要部の名詞を修飾する要素を「すぎる」が修飾する場合がある。図式的に示すと、以下のような構造である。

- (43) a. [名詞句 修飾語 名詞]  
b. [名詞句 修飾語 名詞] すぎる

(43a) は通常の名詞句の構造を示したものである。例えば、「いい人」などがこれに相当する。補助用言「すぎる」はそうした名詞句に接続し、名詞句内の修飾語を修飾することができる。例えば「いい人すぎる」では、「すぎる」は「いい」を修飾していると考えられる。これは「\*人すぎる」では意味が通じないことからわかる。こうした例が3例ほどあった。

- (44) a. 彼女はただあまり平らかな気持すぎて縫子のことを話すのでさえどこやら永年世話したお針子の一人のことも話すと同じようなところがあった。(宮本百合子『縫子』)  
b. 天井や戸や窓を見まわした。けれども、人一人を死なすには、それ等はあまり扁平な形すぎる。(宮本百合子『日は輝けり』)  
c. それでは、<sup>こうそんおう</sup>篁村翁にでも言わせれば、余りに「紫の矢<sup>やがすり</sup> 紺 過ぎている」それである人のいつも作るような、殆ど暴露的な歌が作られようか。(森鷗外『青年』)

このような例は全体から見れば僅か0.3%と極めて希である。

## 2.2. 「すぎる」のプロトタイプ

以上、2.1節で示したように、補助用言「すぎる」の過剰が何を修飾するかを考えた場合、「X+すぎる」の形で解釈可能な用例が最も多いことがわかった。これに相当するのは、まず「形+すぎる」である。そして、「動詞+すぎる」のうち、被修飾要素が非明示的な場合がこれに相当する。また、「名詞+すぎる」のパターンで、「すぎる」が名詞句でなく、X<sup>0</sup>レベルの名詞に接続している場合である。

- (45) a. 「形+すぎる」 566  
b. 非明示的な「動詞+すぎる」 383  
c. X<sup>0</sup>レベルの「名詞+すぎる」 14



963 (1,063 例中 ; 90.6 %)

そうした用例は全体の 90.6% に相当する。

採集した用例の分類における割合は、「すぎる」の有標性 (markedness) と相関関係にあると言えるかもしれない。例えば、「いい人すぎる」のような形を特殊であると考えたとするならば、その頻度が極めて低いことがそれを実証すると言えるかもしれない。あるいは、「名詞+すぎる」よりも「形+すぎる」のほうが基本的だと主張するならば、 $17:563 \approx 1:33$  という数字がそれを実証するかもしれない。もちろん、有標性、あるいは基本的・派生的というような概念を用いずに、言語理論を確立することも可能であるが、言語活動において、分類上の格差が観察されるとするならば、それは言語理論の説明の対象となりうる。

「形+すぎる」においては過剰の意味が修飾する概念は明らかであり、また、「形+すぎる」というコンパクトな表現だけで両義的に解釈されることなく十分に意図が伝わるから、これらが補助用言「すぎる」のプロトタイプの形式だと考えることができる。そうした形式が全体の半数以上を占めるという事実は、そうした主張を裏付けるものだと言えないだろうか。逆に、これが仮に全体の 1 割にも満たないとしたら、そうした主張の正当性は疑われるだろう。

「動詞+すぎる」のパターンが多いのはどのように考えればいだろうか。日本語全体を見ると、日本語を特徴づける性質として、「動詞+動詞」の複合動詞が多く見られることが挙げられる。従って、「形+動詞」の形をもつ「形+すぎる」から「動詞+動詞」の形である「動詞+すぎる」へと補助用言の用法が拡張するのは日本語話者にとってはむしろかしいことではないと思われる。(逆にどのようにして補助用言「すぎる」が生まれたかを考えたとき、日本語では複合動詞が頻繁に用いられるということが関連していると考えられる。)そして、「形+すぎる」の形式のみで意味が通じるのと同様に、「動詞+すぎる」だけで意味が通じるようなパターンが多く用いられると考えられる。「会社に早く着きすぎる」のような例は「早く」のような表現を加えなければならない分、労力を要し、また、プロトタイプとは性質が異なるので実際にはそれほど用いられないのだろう。(聞き手からすれば、過剰の概念を「早く」と結びつけなければならない。)[名詞+すぎる]のパターンが少ないことに関しては、既に述べたように、一般に名詞はモノを(直示的に)指し示し、程度(をもつもの)を指すことが少ないことが関係しているのだろう。

### 2.3. 言語表現としての補助用言「すぎる」

この節では、用例を採集した際に、「すぎる」構文に特徴的であると感じたいいくつかの点を示していく。



### 2.3.1. 「すぎる」と共起する表現

日本語で過剰を表す場合、「理不尽すぎる要求」のように補助用言「すぎる」を使うこともできるが、「あまりにも理不尽な要求」のように「あまりにも」といった修飾語を使うこともできる。「あまりにも」は基本的には被修飾要素の直前にあらわれると思われる。ただし、直前になくとも、「あまり」が被修飾要素に先行していれば、日本語として不自然ではないようである。(46b)は(46c)よりも容認度が高い。

- (46) a. 太郎はあまりにも早く学校に着いた。  
b. (?) あまりにも太郎は早く学校に着いた。  
c. \*太郎は早くあまりにも学校に着いた。

また、「あまりにも」は「すぎる」と共起することが多い。「あまりにも理不尽すぎる要求」は日本語として問題はない。意味を比べた場合、「理不尽すぎる要求」「あまりにも理不尽な要求」「あまりにも理不尽すぎる要求」の間に、真偽条件が変わるような違いはないと考えられる。このように、補助用言「すぎる」と「あまり」のような表現が共起する例がいくつかある。そして、実際には「あまり」「あまりに」「あまりにも」「あんまり」という変種が見つかる。そうした例は全部で251例(23.5%)ある。まず、その内訳を表7に示す。

表7

あまり	114
あまりに	70
あまりにも	5
あんまり	62

筆者の言語直観では、「あまり」「あまりに」「あまりにも」を「～理不尽すぎる要求」の「～」の部分に入れた場合、「あまりにも理不尽すぎる要求」>「あまりに理不尽すぎる要求」>「あまり理不尽すぎる要求」の順序で容認度が下がっていく。従って、採集した用例において、「あまり」の例が最も多く、「あまりにも」の例が極端に少ないことは驚きである。これが筆者個人レベルの問題なのか、それとも、時代により、そうした語句の用法が変わったのかは今のところわからない。

次に、「あまり」などの表現の位置について見てみよう。これは2つのパターンに分けられる。ひとつは、「形+すぎる」と「あまり」があらわれる場合で、もう一つは過剰が修飾する概念が明示的である場合である。前者は(47a, b)に対応し、後者は(47c, d)に対応する。

- (47) a. この問題はあまりに難しすぎる。

- b. あまりにこの問題は難しすぎる。
- c. 太郎はあまりに早く学校に着きすぎた。
- d. あまりに太郎は早く学校に着きすぎた。

まず、「形容詞+すぎる」のパターンで、「あまり」などの表現が「～すぎる」に隣接していない例は、全部で16例ある（内訳はのちに示す表8を参照）。そのうち、複合動詞の前に「が」格のついた主語がある場合が13例である。そのうちのいくつかを示す。

- (48) a. あまり毛が厚すぎて、頭を冷すに不便であったからで。(島崎藤村『芽生』)
- b. 心には、あまり刺戟が強過ぎた。(宮本百合子『日は輝けり』)
- c. お前等二人が余り仲が好過ぎるとて人がかれこれ云うそうじゃ。(伊藤左千夫『野菊の墓』)
- d. 彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。(夏目漱石『こころ』)
- e. だって、あんまり廻り合わせが悪過ぎるじゃないの。(夢野久作『少女地獄』)

上以外のパターンを示す。(49c)では2つの構成素が「～すぎる」の前にある。

- (49) a. これは僕が裸だというので、余りお察しの好過ぎたのかも知れない。(森鷗外『キタ・セクスアリス』)
- b. ことに子供の時からいっしょに遊んだり喧嘩をしたり、ほとんど同じ家に生長したと違わない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためかはなはだ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟を与えるに足りなかった。(夏目漱石『彼岸過迄』)
- c. 行列を見ようとしてマンションハウスの前に立ってたところが、日本と違って向うのものがあんまり君より背丈が高過ぎるもんだから、苦し紛れにいっしょに行った下宿の亭主に頼んで、…(夏目漱石『明暗』)

形容動詞の例は5例である。

- (50) a. 後から考えると、余り私が正直過ぎたと思います。(夏目漱石『模倣と独立』)
- b. 彼の顔の表に並んでいる眼鼻口のいずれを取っても、その奥に秘密を隠そうとするには、余りにできが尋常過ぎたのである。(夏目漱石『彼岸過迄』)
- c. …、あまりにそれは勝手すぎるではないかと私がいっても、こんなにしたのは

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

それなら二人の中の誰だふたり うち だれという。(横光利一『鳥』)

- d. 僕もその小説は余程まえにいちど読んだことがあって、あのかそけきロマンチズムは、永く僕の心をとらえ離さなかったものであるが、けれどもあのなかのあまりにもよろずに綺麗すぎる主人公にモデルがあったとは知らなかったのである。(太宰治『彼は昔の彼ならず』)
- e. たった二つならあんまり日本は貧乏すぎるて、資本主義などと云えたものじゃない。(横光利一『旅愁』)

「動詞+すぎる」のパターンで、過剰の意味が修飾する概念が明示的である場合において、「あまり」などが複合動詞と隣接していない例は全部で4例である。

- (51) a. しかしそれを嬉うれしがるには、彼女の胸が、あまり自分の感想で、いっぱいになり過ぎていた。(夏目漱石『明暗』)
- b. 現代のように量的に進歩した物理化学界で、昔のような質的発見はもはやあり得まいという人があるとすれば、それはあまり人間を高く買い過ぎ、自然を安く踏み過ぎる人であり、そうしてあまりに歴史的事実を無視する人であり、約言すれば科学自身の精神を無視する人でなければならない。(寺田寅彦『科学について』)
- c. 健三は兄の道伴になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎた。(夏目漱石『道草』)
- d. いったいこういうと失礼なようですが、あなたがあんまり延子さんを大事になさり過ぎるからよ」(夏目漱石『明暗』)

表 8

	「形容詞」	「形容動詞」	明示的な「動詞」
あまり	10 (36 例中)	1 (20 例中)	2 (20 例中)
あまりに	2 (16 例中)	2 (22 例中)	1 (10 例中)
あまりにも	0 (1 例中)	1 (3 例中)	0 (0 例中)
あんまり	4 (14 例中)	1 (11 例中)	1 (9 例中)

先に表7で示したように、全体の23.5%において、「あまり」などの表現が「～すぎる」と共起する。採集した用例を見渡すと、それ以外にも共起する表現があることに気づく。「少し」と「ちと」である。

- (52) a. じつは、君たちには、すこしむずかしすぎはしないかと、わたくし心配しています。(海野十三『ふしぎ国探検』)
- b. 「これにしましょうか」叔母はそのうちの一つの櫛を取って見まわしながらいった。「でも少し好すぎるわねえ。惜しい気がするわ」(金子ふみ子『父』)
- (53) a. ちと大き過ぎた二階の足音が、破産した銀行頭取だと分かる所で、こんな影を画くような手段に馴れない見物が、始めて新しい刺戟を受ける。(森鷗外『青年』)
- b. もっとも衣服を脱いで渡るほどの大事なのではないが、本街道にはちと難儀過ぎて、なかなか馬などが歩行かれる訳のものではないので。(泉鏡花『高野聖』)

「～すぎる」という表現は否定的な判断を伝える。それを「少し」や「ちと」を加えることで表現を和らげる効果が働いていると考えられる。文脈にもよるが、一般に「むずかしすぎる」のほうが「とても／非常にむずかしい」よりも否定的な意味合いが伝わるとされる。「少しむずかしすぎる」というように「少し」を加えることで、超過の度合いが僅かだが基準を超えているという意味合いになる。「少し」の例は98例、「ちと」の例は21例見つかる。合わせると119例と全体の11.1%であり、『過ぎる』構文によくあらわれる表現だと言えよう。興味深いことに、「ちと」と同義と思われる「ちよつと」の例は皆無である。

### 2.3.2. 強調を表すために用いられる補助用言「すぎる」

補助用言「すぎる」が決まったパターンであられる場合がある。次のような例である。

- (54) それと違って、スカンクスの奥さんはすばいような美人で、鼻は高過ぎる程高く、切目の長い黒目勝の目に、有り余る媚がある。(森鷗外『青年』)

上の例で、「高過ぎる程」という表現は「鼻は高く」の「高い」という形容詞を意味的に強めている。このようなパターンが少なからず見つかった。「～すぎるほど～」に加えて「～すぎるくらい～」があり、1,068例中39例見つかった。「すぎる」が接続する品詞は、形容詞が2例、形容動詞が8例、動詞が32例、名詞が1例である。「動詞+すぎる」のパターンが最も多いことになる。例をいくつか示そう。

- (55) 「形容詞+すぎる」
- a. まぶしかった日光の反射は彼自身の印画を若過ぎるほど若く見せて、それが自分の旅人姿ともちよつと受取れなかった。(島崎藤村『新生』)

「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

「形容動詞+すぎる」

- b. こうした二つのものが相接触すればいつかはけんかになる事が当然すぎるほど  
当然な帰結である。(寺田寅彦『自然と生物』)

「動詞+すぎる」

- c. いずれも尖りすぎるほど尖った神経と狭い女の胸とを示したようなもので、読んで見る岸本には余り好い気持はしなかった。(島崎藤村『新生』)
- d. 心は緊張し過ぎるほど緊張していた。(梶井基次郎『器楽的幻覚』)
- e. それに引きかえて、ずっと見廻わしてみた園の部屋は森閑として、片づきすぎるほど隅まで片づいていた。それを見ると園は父の死んだという事実をちらっと実感した。(有島武郎『星座』)
- f. ……ですから無論レミヤ [#ゴ] の評判は二人とも知り過ぎる位よく知っていたので御座いますが、… (夢野久作『靈感!』)
- g. 私が注文した四種の料理によって、説明し過ぎるほど明瞭に説明している。(夢野久作『暗黒公使』)
- h. その時、岸本は日頃逢い過ぎるほど人に逢っていることを書いて、吾儕二人は互いに未知の友として同じ柳並木のかげを楽もうではないか、という意味の返事をその青年に出した。(島崎藤村『新生』)
- i. ……ああ……浅墓な私……私は校長先生のお金に関する醜いお仕事の数々を知り過ぎるくらい、存じておりました。(夢野久作『少女地獄』)
- j. 私達兄弟はお互いに、お互いの気持を知り過ぎる位知り合っているのです。(夢野久作『靈感!』)

「名詞+すぎる」

- k. あの別嬪の嬪も好人物過ぎる位、好人物という話です(夢野久作『巡查辞職』)

こうした例では「～すぎるほど～」では「～すぎる」の部分が残りの「～」の意味を強めている。(55i) では「知り過ぎるくらい」のあとに形態の異なる「存ずる」が続いている。このような「～すぎるほど／くらい…」のパターンを以下にまとめて示そう。

- (56) a. 私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。(夏目漱石『こころ』)
- b. 家の内はむしろ静か過ぎるくらいしんとしていた。(夏目漱石『門』)
- c. 津田から云えば地味過ぎるくらい質素であった。(夏目漱石『明暗』)

## 2.3.3. 活用について

補助用言「すぎる」が接続する要素が「…ない」の形で終わる場合、「～なすぎる」という形と「～なさすぎる」という形が観察される。存在を表す「ある」の反意語に相当する否定の「ない」に関しては「なさすぎる」という活用になり、そのような例しか見つからない。

- (57) a その心はいかにも弱くて落ちつかなくって、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見えた。(夏目漱石『門』)
- b こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに銭がなさ過ぎる。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- c 先方では博士の奥さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院まで買収して知らぬ間に、前歯の欠けたのさえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- d しかし、ないところにはなさ過ぎる金から見たら、それだけまとまった高でも大きい。(島崎藤村『分配』)
- e 世の譬にも天生峠は蒼空に雨が降るといふ、人の話にも神代から杣が手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは余り樹がなさ過ぎた。(泉鏡花『高野聖』)
- f 十八にしちゃ意気地がなさ過ぎるじゃないか。(夢野久作『暗黒公使』)
- g 「いずれ、もう一度あらためて伺いますが、どうもあなたから云われたんじゃ、少し芸がなさすぎるなア。」と矢代は傍の千鶴子を顧みて笑った。(横光利一『旅愁』)
- h しかもこれらのあまりといえは変化のなさすぎるような心の<sup>イメージ</sup>印象の後には、何か<sup>いま</sup>忌々しい動揺が起ろうとしているように思えた。(有島武郎『星座』)

否定の形態素「ない」が他の要素に接続する場合や「～ない」の形で否定的な意味が感じられる場合、換言すると、「ない」という形態素に分析できる場合は、「…なさすぎる」となるようだ。「\*若くなすぎる」ではなく「若くなさすぎる」、「\*情けなすぎる」でなく「情けなさすぎる」、「\*あどけなすぎる」でなく「あどけなさすぎる」である。これに対し、「幼すぎる」が正しく、「幼さすぎる」は不自然な気がする。そして、「少なすぎる」であり、「少なさすぎる」ではないと思うのだが、実際には後者の例が見つかった。

- (58) 「へえ、おれは自分じゃ、夢がすくなさ過ぎると思うんだが--夢のない人の<sup>しょうがい</sup>生涯ほど<sup>あじき</sup>味気ないものはない、とおれは思うんだが。」(島崎藤村『夜明け前 第一部上』)

## 「すぎる」構文：書き言葉における実例の分析

動詞に「ない」が接続し、それに「すぎる」が接続する場合はどうなるのだろうか。「飲まない」に「すぎる」をつける場合、現在では「飲まなすぎる」と「飲まなさすぎる」の両方が許容されるようである。採集した用例の中に「動詞+ない+すぎる」のパターンは3つ見つけたが、それらはすべて「～なすぎる」の形だった。

- (59) a. しかしそれには相手の方があまりに変らな過ぎた。(夏目漱石『道草』)  
b. いくら英吉利人イギリスじんが大きいたって、どうも君じゃ辻褄つじつまが合わな過ぎると思ったよ。  
(夏目漱石『明暗』)  
c. その暗闇の中を、芝居の「だんまり」のように、徐々に窺うかがい寄る奸策を、また、こっそりと構えた術策で身を替す世の中は、若しそれを事実とすれば、あまりに堪らなすぎるものではないか。(宮本百合子『渋谷家の始祖』)

(59c) にあらわれている「堪らない」は一つの表現として確立し、辞書にも掲載されている。

### 2.3.4. 等位接続の例

「すぎる」が等位構造に接続する例もある。仮に「A+B」を等位構造とした場合、「A+B+すぎる」において、過剰の意味はBのみを修飾すると考えることも可能だが、A+Bの両方を修飾するとも考えられる。そうした可能性のある表現が7つほどあった。

- (60) a. …、ただその姿と心が、あんまり女らしくて優し過ぎるのがこの事件の恐ろしさと不思議さを生み出す原因になっているのではないかと、考えれば考えられる位のことで御座います。(夢野久作『靈感!』)  
b. 千代子は色の美しい、癖のない、長くて多過ぎる髪の所有者だったからである。(夏目漱石『彼岸過迄』)  
c. それにはあまりに専門的で、またあまりに高尚過ぎた。(夏目漱石『明暗』)  
d. 接触したというには、あまりに短くってかつあまりに鋭過ぎた。(夏目漱石『三四郎』)  
e. それでこの見知らぬ国へ連れられて来て、わずかの間に、相手になる日本人の気心をのみ込んで卑屈な妥協を見いだすにはあまりに純良高こうしやう尚過ぎた性質をもっていたのである。(寺田寅彦『自然と生物』)  
f. 延び過ぎた芝の根もとが腐れかかっているのを見た時に、私はふと単純な言葉の上の連想から、あまりに榮え茂り過ぎた物質的文化のために人間生活の根本が腐れかかるのではないかと試してみた。(寺田寅彦『自然と生物』)  
g. …、何だか、あまり子供っぽく、甘え過ぎていますから、私は、いま考えると、



いらいらします。(太宰治『千代女』)

例えば、(60c) では「すぎる」が「専門的な」と「高尚な」の両方を修飾する可能性があるが、これは両者の前に「あまりに」が加わっていることから、その可能性は高いと思われる。(60d) も同様である。また、(60g) で「すぎる」が「子供っぽい」と「甘える」の両方を修飾するなら、両者は形容詞・動詞と統語範疇が異なるので、興味深い例である。

### 2.3.5. その他

「すぎる」が他の形態素と結びつくときにどのような語順になるだろうか。例えば進行相を表す「ている」形とはどのような関係になるか。「知りすぎている」の他に「知っていますすぎる」も見られる。

- (61) a. 朝子は客として、何かのサンプルのようにして、この愛する都の生活に寄食するには、あまりにもここの本当の姿を知っていますすぎるし、自分の仕事を愛してもいるのだった。(宮本百合子『広場』)
- b. 人と始て話をして、おしまい面白い小僧だけは、結末が余り振っていきすぎる。(森鷗外『キタ・セクスアリス』)

(61a) では「知っていますすぎる」、(61b) では「ふるっていますすぎる」という形が用いられている。

それでは、受身の形態素はどうか。受身と「すぎる」が共にあらわれる用例は 12 例あったが、そのうち 11 例は「…られすぎる」という形である。その点で、以下の例は例外的である。

- (62) 余り望を置き過ぎられては困るとい<sup>のぞみ</sup>うのだろうと敬太郎は解釈したが、それでも会わないよりは増しだぐら<sup>よろ</sup>いに考えて、例に似<sup>よろ</sup>しく頼む気になった。(夏目漱石『彼岸過迄』)

筆者には「置きすぎられる」よりも「置かれすぎる」のほうが自然な気がする。なお、使役については「…すぎさせる」という形は見つからなかった。

副詞的要素を過剰の意味が修飾する場合、「…副詞…動詞+すぎる」の形式で表現するのが普通だが、以下のような用例も見つかった。

- (63) a. しかし、このような二人が、パリで別れて東西の帰路をそれぞれ辿って来て、

そして、今この港の埠頭で初めて会うときが、丁度こんなであつたらうと思  
い合うことは、実際、どちらにも少し遅すぎて来たのだと矢代は気付くのだ  
った。(横光利一『旅愁』)

b. わたしは遅すぎてパリへ来た。(横光利一『旅愁』)

(63b) の例は「遅くパリへ来すぎた」と言うほうが普通だろう。こうした表現が用いられるのは、ヨーロッパの言語に似せて日本語を表現している顕れだろう<sup>9)</sup>。

### 3. まとめ

本稿では、補助用言「すぎる」が実際の言語活動においてどのように使われているかを、明治期から昭和前期の文学作品を中心に用例を採集し、分析をおこなった。その結果、「～すぎる」の形式がそれ独自で解釈可能である用例が多いことがわかった。「形+すぎる」(＝「形容詞+すぎる」+「形容動詞+すぎる」)では、補助用言「すぎる」が先行要素が表す意味を修飾する。そのような例が1,068例中566例(53.0%)を占める。また、「動詞+すぎる」のパターンで、「昨日は(酒を)飲みすぎた」のように、「すぎる」が修飾する概念が非明示的な場合が383例(35.9%)あった。こうした例では「すぎる」の解釈のために被修飾要素をわざわざ表現する必要がなく、簡潔な形で表現がおこなわれている。そして、「すぎる」を解釈するために基本的に「～すぎる」に注意を払うだけでよく、「早く駅に着きすぎた」の「着きすぎ」を解釈する際に「早く」を見つけるような作業をおこなわなくてよい。その点から見ると、解釈に負担のかからない例が多いのは不思議ではない。また、「名詞+すぎる」のパターンは、全体の2%にも満たないが、これは名詞がふつうモノを指し示すことから予測できることである。

今回、採集の対象となったデータは21世紀の日本語とは若干異なるかもしれない。例えば、筆者の個人的直観では「あまり若すぎる」のように(「あまりにも」でなく)「あまり」を使うのは不自然である。これが時代による違いなのか、今後、調査する必要がある。また、書き言葉でなく話し言葉ではどうなっているのかも検討していく必要がある。

#### 注

1) 詳しくは以下の論文を参照されたい。

Nakamura, Tsuguro. 2003. "Notes on the Japanese Supporting Verb *SUGIRU*: A Syntax-Semantics Mismatch." In *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*. Edited by Chiba, Shuji et al. 477-492. Kaitakusha.

2) 補助用言「すぎる」は(等位接続でない)複数の要素を同時に修飾することはできない。次の例を考えてほしい。

(i) 時々遠くから不意に現れる訴も、苦しみとか恐れとかいう残酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉体と慾得を離れ過ぎるようになった。(夏目漱石『門』) 筆者の言語直観では、「離れ過ぎる」の「すぎる」は「はなれる」の度合いが過度であることを示している。それは「あまりに」という表現があることによるものである。

「すぎる」構文の解釈には語順も重要である。(ii) と (iii) を比べてほしい。

(ii) 太郎は遠くにボールを投げすぎた。

(iii) 太郎はボールを遠くに投げすぎた。

筆者の判断では、(ii) で過剰なのはボールの数であり、(iii) では距離である。どちらの文においても、数量と距離の両者が過剰であるという解釈はできない。

- 3) ただし、「A は B と等しすぎる」が自然に解釈される状況もないわけではない。その場合、比較される観点がいくつかあって、その数が多すぎることであり、「等しい」が度合いをもった属性として解釈される。
- 4) そのほかも自動詞的なものである。「いる、売れる、かかる」が2例ずつある。1例のものは「集まる、あまる、かさむ、こめられる、たまる」である。なお、便宜上、(35a) をこの分類に含めた。
- 5) 欧文直訳体については次の文献などを参照されたい。

森岡健二。1999.『欧文訓読の研究。－欧文脈の形成－』明治書院。

\* 本稿は 2002～2003 年度国外研究の成果の一部である。

